

代表 主軸は「通信制高」

帝京、国見、それとも青森山田？ サッカーのワールドカップ（W杯）カタール大会に臨む今回の日本代表に、最も多くの選手を送り出した高校はどこだろうか。Jリーグのユース（高校年代）出身者が初めて代表の半数に達するなど増えたことで、意外な学校の出身者が最大勢力になった。

茨城・第一学院出身 最大勢力

10月中旬、太平洋に面した茨城県北部の高萩市を訪ねた。2008年3月に閉校した県立高萩工高の跡地、現在は市が所有する石滝サッカー場で平日の午前中、高校生がボールを追い掛けている。第一学院高のサッカー部員たちだ。



平日の午前中に練習する第一学院高のサッカー部員たち

今回の日本代表26人のうち、久保建英（レアル・ソシエダ）、酒井宏樹（浦和）、山根親来（川崎）、伊藤洋輝（シュツットガルト）の4選手が第一学院高出身だ。他にも香川真司（シントトロイデン）や原口元氣（ウニオン・ベルリン）、柿谷曜一朗（名古屋）ら代表経験者も在籍していた。開校は05年。小泉純一郎首相時代の「構造改革特区」で教育特区の認定を受けた高萩市に、広域通信・単位制の株式会社立高校として設置された。当初の名称はウィザス高で、12年から現校名になった。元々は高校卒業程度認定試験（旧大検）の専門予備校だった。不登校や高校中退、「働きたいが学びたい」といった、さまざまな生徒が約1万人在籍する。高萩本校は約5900人で、約1000人の通学コースを除く大多数は、通信で学んだり、全国各地のキャンパスを活用したりしている。通信では、授業のオンライン配

授業と両立 競技打ち込み実績

信やデジタル教材などで課題をこなす。体育や家庭科などの実技をはじめ、対面が必要な授業は宿泊施設に滞在しながら通学して単位を取得する。久保らも短期間、高萩で授業を受けたという。

久保らのほとんどは高校年代にJリーグクラブの育成組織、ユースに所属していた。トップクラスの選手となれば、ユース年代からJリーグの試合に抜てきされることもある。ユースの練習は一般的に夕方からで、選手は放課後に参加するが、トップチームの練習は昼間にあり、授業との両立が難しい。サッカーに集中しつつも、高校は卒業したい。そうしたニーズを通信制の同校は満たすことから、進学先に選ぶユース在籍者がいるという。

一方、高萩の通学コースのうち、約半数の50人ほどをサッカー部員が占める。高体連所属の部活動のため、選手の登録制度上、久保のようなユース所属選手と一緒に活動はできないが、こちらもサッカーに集中できる環境が「売り」となっている。

通学コースではあるが、学校で授業があるのは金曜日のみ。07年にスポーツコースができて誕生したサッカー部は火曜・木曜は午前

中に練習が始まり、午後はミーティングや筋力トレーニングを行う。リポートなどの学校の課題に時間を充てることもできる。月曜は練習が休み。専用グラウンドこそないものの、14年度には全国高校選手権に出場した。

今回、日本代表に選ばれた4人のうち、山根は唯一、通学コースの出身で同校サッカー部に所属していた。中学時代までJ2東京ウの育成組織に所属したが、ユースに昇格できず、同校に進んだ。桐蔭横浜大を経てプロとなった経歴は、現役部員にとって憧れの的になっている。

サッカー部主将の3年生、栗原龍世（りゅうせい）さん（18）は東京都八王子市出身。「サッカーに打ち込めて良い環境だと思って進学を決めた」という。現在は寮生活で、大学に進学して競技を続ける予定だ。「日本代表にも選ばれた山根選手に、みんな刺激を受けている」と語る。高橋秀弥監督（56）は「サッカーを生活の中心にしたい、高校課程を卒業したいという子たちが通ってくる。サッカーを真剣にやりたいという子には適した場所だ」と話し、山根をはじめとする同校出身者の活躍を願っている。【尾形有菜、写真も】